

閑話、漫筆

ポ ン コ ッ を 買 う

大 西 巖

《炭の粉，たどんの粉は捨てずにもう一度固めて使え。密柑の皮はほして風呂の燃料にせよ。新聞に挟み込んである広告紙もちり籠に入れないでたたんでおいて鼻紙にせか，鼻をかんだ紙は乾かしておいて便所に使え。客齋と思うな，国のための節約と考えよ》

まさか広告紙の二重使用はしなかったが，死んだ親父は確かに締め屋であった。私が子供達に小遣銭を手渡す時には必ず

《つかうじゃないぞ》とか《貯金するのじゃぞ》

をつけ加える。これは私が子供の頃，耳にたこのできる程聞かされた言葉であり，私も浪費をいましめ，貯金を励行することは極めて当然な訓示として聊かの批判を加える必要を認めずに受けついできた。私が親父からもらった1銭，2銭の小遣銭は直ちに郵便切手となり，郵便局から発行している10銭あるいは20銭用の貯金台紙に一杯貼ると，通帳と共に局へさし出し，預金通帳に記入してもらう。時々通帳を開き，1円50銭，2円に増して行くのを見て喜んだものである。すなわち楽しみは貯金そのものの中にあつたと記憶している。

ところが戦後は新教育のおかげで子供は直ぐ批判する。

《おやじさん，貯金して一体何買う気か》

私は即座に

《馬鹿者。始めから物を買う目的の貯金などあるものか》

とたしなめ，さらに

《山内一豊の妻は始めから馬を買うために貯金していたのではないぞ。あの時，夫に馬が是非必要になったから買ったまでだ》

とつけ加えて心持ち胸をそらす。子供達は判ったような，判らないような顔でさらに反問する。

《銀行へ行ってごらん。貯金には育英，結婚，住宅，家庭近代化，自動車，旅行などと目的預金は広告してあるが，目標のさまってない貯金の広告は出ていないよ》

成る程そんな広告があつたなとは思つたが，私はなかなか折れない。

《銀行屋という奴はおのれの利益のためには国全体のことを考えない。贅沢は敵だ，そんな広告は国を亡ぼ

すためのスパイの謀略に等しい》

するとこんどは姉が弟からバトンタッチを受ける。

《日本の経済は消費経済で成っているのでしょう。お父さんのようにテレビの1台も買わない人ばかりだったら潰れる会社が沢山でき，ほかの会社にも連鎖反応が起こすと困るでしょう》

それも一理はあろう。しかし，消費は自然増加の本質を持っている。国民がじゃんじゃんと製品を消費し，その資材を国外に仰ぎ，しかも国際改変がうまく行かねば，何時かは国家経の破綻がくるだろう。池田さんが輸出超過ですとテレビからしわがれ声を流しても，原価を割っての輸出なら欠損の上塗りにすぎない。残念ながら私は経済問題に弱いのではっきりとした自信が持てない。そこへ老妻までが子供達に味方し

《目標を決めて積立てることが計画性のある暮らしじゃないですか》

と，いらざる口を挟むので私の自信はますますぐらつく。

《自分には目的預金の如きものは必要でない。もし要るなら古女房取換預金ぐらいだ》

にくまれ口を叩くと鸚鵡返しに

《棺桶預金の方が先でしょう》

と来る。

娘が社会人として勤務し，息子が大学に通う頃になると目標がムービーカメラやテープレコーダーから飛躍して自動車ということになる。私は何を馬鹿げたことをと問題にもしない。しかし，夕食後子供達と家内と3人寄ってひそひそと相談する日が多くなり，私は反対にますます超然となる。馬鹿者達による鹿ヶ谷の密議はやがてまとまり，自動車購入はわが家の総路線となつたらしい。

財源は娘の積立てた俸給の全額支出と家内のへそくり株の現金転換であるから，親父とは何の関係もないと敵軍の旗印は勇ましい。しかし，よく考えてみると食費，被服費，交通費など全部こちらもちなら親父より金持ちになれるだろうし，またたとえ少額でも家内の株だって同じことである。さらに家内の場合は手離さない筈の株の上り下りに一喜一憂して皆に笑われて来たものである。それを今度は底値の時にほんとうに叩き売ろうとい

うのであるから何処かが狂っている。結局私は家内一同の神がかり的な攻撃の前に降伏することになったが、私は家の近くにパブリカ販売店がきたので、この店の車を買わねば近隣の誼みに反するとの道義的立場からパブリカを推した。しかし敵さんは同じ買うならぎりの線でブルーバードだと主張して譲らない。私は自動車のことはよく判らないが、値段の方だけは心得ていた。なので道義的主張を繰返したが、結局は敗北に終わった。

その頃、家にいた2匹の駄犬はそれぞれ病死と家出で犬小屋はからになっていた。心安いお宅にコリーの子供が生れるから1匹ゆずって頂く約束になっていたが、いまだに何の音沙汰もない。ある日それは大阪球場でプロ野球のオープニングゲームの行われる日であり、私は是非その試合が見たいので出て行った訳であるが、ふと難波の駅前舗道で紙函の中に数匹の子犬を入れて売っている男に会った。1匹500円という安さなのですぐ商談が成立し、丈夫そうな奴を買うことにした。男は

「もう1匹買って下さいよ。2匹なら700円にまけておきますから」

としきりに契める。私は目を閉じてしばらく考えた。2匹買えばたちまち3割も安くなるのだからこれはよい買物だと判断すると直ちにもう1匹の駄犬を選んでその紙函に入れさせた。野球のことをすっかり忘れ、タクシーを捨てて意気揚々とわが家に戻ると庭にはコリーの子犬がむくむくとした体で何度も転がりながらあちこちと歩き廻っている。私は2匹の子犬を両手に抱いて家内に見せた。子犬の体温が暖かく掌に伝ってくると生きとし生けるものへの愛情がひしひしと迫ってくるようだ。家内は私と犬をみつめてあきれ顔である。

「コリーの子をゆずって頂くことになっていたのはご存知でしょう」

「知っていたが、余りおそいので道で買って来たまでだ」

「それでは1匹だけにしておけばよかったのに」
「1匹なら500円だし、2匹買えば700円だもの買いとくだ」

「いくら値引きするといってもお茶碗買うのと訳が違いますよ。生きものは世話してやらねばならないのですから」

私はそんなものかと思ったが、同じ世話するなら1匹でも3匹でも余り変わるまい。犬たちは仲間の多い程淋しくなくてよからうと考えていた。

「子犬1匹では淋しかろう。遊び友達の多いほど楽しかろう。遊び友達の多いほど楽しいんだよ。1匹だけ飼うのは可愛いそうだ」

どんな運命が待っているかも知らずに3匹の子犬はもつれ合って転がる。娘も息子も子犬を交互に抱いて可愛がっている。

「めすはいないから、これ以上はふえないよ」

私の熱意で結論は決った。息子は駄犬をだきあげて薄い毛がまばらに生えたおなかをさすりながら

「お前は親父の道義的見地から買われて来たんだぞ」

◇ ◇ ◇

去年の夏、息子は同じ大学の級友と約1カ月に亘って北海道一周のカーツアーをする計画を樹てた。自動車は彼の友人の父が新車購入に際し、下どりに出す筈であった。56年型のダットサンである。せなかにトランクを背負ったようなゴツゴツした形のこの車は今ではほとんど街では見受けられないが、上手につかっているためまだまだ走れるという。値段も10万円以上でとらせる予定であったものを特に4万にして払下げて下さったという。同行4名であるから1人が1万円を出せば済むという計算かららしい。私は車も見えていないし、そんな事情も知らないから

「4万円の車では東京まででも危なつかしい。故障したら捨てて汽車で帰ってこい」

また津軽海峡を渡るフェリボート代が片道1万円と聞き

「うまく北海道が一周できたら、函館近くで捨ててこい。フェリボート代が助かるから、その方が経済的だ」などと忠告しておいた。

息子達が出発して10数日を過ぎた頃「ダットサンの乗心地の悪いのと頑丈なのは腹がたつくくらいだ。家まで乗って帰ることに意義があると思うので、お金がかっても北海道で捨てたりしない」という意味の便りが届いた。やがて彼らは予定通り目的を終え、野宿で汚れた体を脂垢の滲み込んだシャツに包み、ぼうぼうと伸びたひげの間に目玉をぎょろつかせて帰って来た。

約1カ月を走り続けた車は見ると汚い限りだった。私はかつてハドソンの河畔に捨ててある自動車の山を見たことがあるが、その中にはもっと立派な車が何台もあったような気がする。4人の学生達はこの車を2万円で売り払って5,000円づつを得ようとする魂膽で買手を探している。買手がつかないと見ると最後は私に話をもちかけて来た。私は直ちに手を打って買取ることにした。そこには彼ら若者がとにかく初志を貫徹したことに対して祝杯をあげてやりたい気持ちが働いたからである。もう一つ都合のよいことがある。私が昔アメリカ合衆国を旅行した時

「プロフェッサーはオーロキブルをお持ちかね」

と失礼な質問をした馬鹿者が数人いた。私はむっつりとして《ノー》と答えてきたものである。しかし、こんどはもしそんな機会があれば何のためらいもなく《ツー》と答えることができる訳である。2万円で日本のひとりのプロフェッサーの体面が保てるならば結構なことだと思う。

私が2台の車を持っていることが何時のまにか仲間達の耳に入り

《2台もあるのに何故遊ばしておくのか。なぜ自分で運転しないのか》

と聞かれる。タクシーに乗っていてさえ私はしょっちゅう気をつかっている。自動車の前をウロチョロ歩いている人間が愚かな邪魔者に見えることさえある。その代り自分が歩いていると自動車なんかに乗って通行人を驚かす奴は人類の敵のように思える。人はその立場によっても考えが変わるものかと感心する。思想の問題、労使の問題、親子の問題、嫁姑の問題などもこれと同じことかも知れない。一度立場を変え考えると話がつき易いのではなからうか。この話は別として、私が運転することになれば、白髪のふえるぐらいはよいが、街に救急車や霊柩車を氾濫させることになっては申し訳がない。

しかし私は悠然として彼らに答える。

《若い時なら別だが、この年になって自分で自動車を運転するような品の悪いことができるものか。もし乗り廻したければ運転手を雇うべきだ》

そのうちに《彼奴の車は2万円のポンコツだ》という噂が広まった。私はとうとう知られたかと思ったが心中甚だ愉快であった。ポンコツという言葉は今までもよく耳にしたが、その語源について考えてみたこともなかった。この言葉は今の私には自分の体の一部のような特に親しみの深いものになっている。そこで語源についてもあれこれと考え始めた次第である。私自身は英語の **Puncture** か工場の金属捨場にあるポンチ屑から来ているのではないかと考えたが、東京大学のK博士は

《コツは骨だよ。ポンは役に立たない気の抜けた野郎、つまりポンスケやアンポンタンのポンだよ》

と珍らしい説を出して下さった。しかし、この先生は人をついでひそかに喜ぶという妙な癖をお持ちのご仁であるから100%の信用はきかない。何れにしてもこの言葉のニュアンスは私の買った車にドンドシャリである。「ポン」が割れた音、折れた音を感じさせるのであろうか。

しかしながら子供達の車と違ってこの車は私の意志で買ったものであり、愛着を覚えている。わが家の門内には子供達の車が納めてあり、ポンコツは置き場がないの

で家のそとにほうりだしたままである。わが家の前の道は一方が袋地のようにつており、車の通り抜けはできないのだから交通の妨げとなることは少い。やがて私が停年退職をした時、庭の一部に離れを造ってそこで読み書きを続けたいが、退職金を建築費へ廻わすと生活が困るだろう。その時にはこのポンコツを庭に引き入れて私の書斎にしようと密かに考えている。車のついたこの離れなら固定資産税の対象にもならない。私のこの遠大緻密な計画は家内の誰にも末だ話していない。やがて彼らが《やっぱり親父は考えている》

と感心する日がくることだろう。その日が楽しみである。私の2匹の子犬も老境に達していることであろうが、元気で生きていて欲しい。



2～3日前に若にお巡りさんがやって来た。

《お宅の前に置いてある車はどここの家の車かご存知ありませんか》

《うちの車です》

と答えると

《それならよいのですが、もし誰かが捨てているのだったらお宅に迷惑だから何処かえ持って行かねばと思ったものですから》

この頃のお巡りさんは日本語の勉強がたりない。

(大阪大学工学部溶接工学科教授)